

《書評》

経営学史学会監修 藤井一弘〔編集〕 『バーナード』

経営学史学会創立20周年記念 経営学史叢書Ⅵ (文眞堂)

高澤十四久\*

1. はじめに

本書は、2013年の創立20周年を迎える経営学史学会が100余年の経営学の歴史を振り返り、その中でも理論として、思想としても社会に多大な影響を及ぼした12人の世界的な経営学者（加えて日本における経営学の発展に貢献した研究者の学説を振り返る2冊が配本される予定とのこと）にスポットを当て、その理論と思想、そしてその現代的意義を体系的に解明することを目的として「経営学史叢書」第1回配本である。

本叢書各巻の基本内容について、編集統括責任者 吉原正彦は、こう記している。「1. 学者の個人史を、時代的背景とともに明らかにする。2. 学説の紹介には、〔1〕学者の問題意識と研究課題、および対象への接近方法、〔2〕学説を支える思想、また隣接諸科学や実践との関連性、〔3〕学説の歴史的意義と批判的評価を盛り込む。3. 学説のその後の展開を示し、21世紀の課題に対する現代的意義を明らかにする。」そして「『叢書』は初学者を対象としているが、取り上げる学者の思想に基づく【深み】と、実践的広がりに基づく【豊かさ】を実現、研究者にも注目される水準を維持することを目指している。」とも記している。（叢書刊行の辞 iii）

2. 本書の趣旨

本書もこの趣旨に従っている。編著者の藤井一弘は前書きにおいて「6つの章からなる本書は、バーナード理論については初心者であるという方々にも、その魅力が伝わるように、と願って編まれたものである。第2・3章は、『経営者の役割』に展開されている理論体系の紹介に当てられている。・・・『経営者の役割』を未だ手にされたことのない方は、この2つの章を糸口にして、ぜひ、直接、その著作に触れていただきたい。」と記している。続けて本書の構成内容に触れている。「第4章は、経営学という学問の中で、彼の理論がどのように研究され、現に研究されているかというテーマを扱っている。・・・この章は、国内外の学者におけるその記録であり、また現在の様子である。特に、海外における現在のバーナード理論の研究動向に詳しくふれている点は、研究者にも興味をもってお読みいただけることと思う。・・・第5・6章は、価値観が多様化し、とすれば深刻なコンフリクトを招く社会状況という問題系、加えて資源・環境制約の中での経営活動ひいては地球社会の持続可能性の模索という問題系、この2つの問題系に、バーナード理論を適用してみるという試みである。・・・2つの章を通じて、その理論の現代的意義については、少なくとも理解していただけるのではない

---

\*専修大学名誉教授

だろうか。」そして第1章に触れて「・・・すぐれてプラグマティックでもあるバーナードの理論体系は、彼の経営経験、そしてその基盤をなす彼の人としての経験を離れてはありえない。・・・第1章はこの論点にかかわるものである。」とも記している。

### 3. 本書の構成

本書の構成は、責任編集者の藤井一弘が担当し、編集者を含む長年にわたってバーナード研究に携わってきた方々と主研究をこれと異にする方、そして若手の研究者からなる6名からなる混成チームによる執筆者によって本書が完成されている。

混成チームによる編著書故の苦労について同じ前書きの末尾に率直にこう記されている。「・・・章によっては、その執筆者に本書全体の構想に基づいて草稿の一部手直しを願ったが、執筆者全体で草稿を調整する機会を持つことは出来なかった。・・・」

評者のこれまでの経験上、執筆者全員が一同に会して何度か草稿について十分に時間をかけて討議し、最終的には編集責任者が編著の内容の一貫性や基本概念などの統一を図ることが是非とも必要である、と思っている。難解をもって知られるバーナード理解に関しては、不可欠のことであろう。

### 4. 本書の評価すべき点：概説的で初学者に適している

本書は、主著である『経営者の役割』のみならず、それを中心にしながらもバーナードのその他の論稿に触れながら、彼の基本思想、業績、人物を概観し、その主要概念を詳細かつ丁寧に解説している。これによって彼の基本問題、研究方法、そして理論体系が明らかにされている。(第1-3章)。本書の一つのハイライトである第4章によって、肯定的、否定的かを問わず、日本および海外における「バーナード研究」の展開やその後の研究への影響にも触れ、彼の思想がその後、どのような学史的展開を生んでいるかを理解することが出来る。

評者への私信において、間嶋崇は、「第4章のような学史的・理論的文脈についてさらに充実した議論をして『経営学史叢書』としては、有意義だったのではないか」と言っている。まさにそのとおりであろう。今日における「バーナード研究」の高い水準からすれば、これに答え応じられる内外の研究者は、本書の当該章の担当者を含めかなりおられるのではないだろうか。今後の事態の良い推移に期待するところ大きいのである。

さらに第5、6章は、現代における経営現象をバーナードの基本思想や理論枠組み、そして主要概念により、分析し、説明し、証明し、適用するという試みを行い、バーナード思想の普遍性を表示している。とりわけ第6章は、バーナードの自然観を解き明かし、庭本佳和著『バーナード経営学の展開—意味と生命を求めて—』(文真堂)にも多くの示唆を得ながら、バーナードの物的経済の観点から地球環境問題と企業活動を適切に論じている。協働システムの4重経済における物的経済の位置とその機能がしかと把握されている。とても興味深く感じている。

### 5. 本書の幾つかの問題点と課題

まず小さな問題から始める。記述の理解を助けるために幾つかの例証がなされているが、もっと身近で分かりやすいものとする事が出来ないだろうか。

次いで第2章第2節に見られる「人間の行為によってものごとをやり遂げる術を追求する経営学・・・」という記述は、評者にとって経営学の本質理解に関して疑問の残るところである。この点に関する評者の見解は、【書評】「岸田民樹・田中政光著『経営学説史』(有斐閣)を読んで」、『専修経営学論集』第89号2009年11月、109ページを参照されたい。

さらに同じ2章の3節の(4)(46ページ)の部分は何を言いたいのか、残念ながら評者の能力においてはその真意を汲みとることは出来ない。

バーナードの主要概念の規定の問題に目を転じよう。組織の構成員と貢献者の概念上の明確な識別がときとして失われている。さらに協働システムの4経済あるいは4重経済、どちらが正確な理解か。本書においては2つの名称づけがなされているが、執筆者相互の理解の面における意志統一は大丈夫だろうか。筆者には協働システムにおける組織経済の統合的な機能の重要性からして4重経済という把握の仕方が妥当であるように思われる。(飯野春樹編『古典入門 バーナード 経営者の役割』(有斐閣), 142-143ページを参照されたい。)

第5章は、「価値観が多様化し、ともすれば深刻なコンフリクトを招く社会状況にバーナード理論でいかに立ち向かえるか」というのが主要テーマであった。しかし実際には、極めて矮小化されて、1990年代の組織文化論が議論してきた組織文化の分化や断片化の議論をバーナードの議論でも説明できるとするにとどまっている。企業という特殊な協働システムにおいて道徳的創造性という観点からコンフリクトがいかに克服されているかについて、ホンダと協和発酵キリンの2つのケース分析が行われた。しかし、それらを選んだ根拠もなんら示すこともないままに2つのケースだけを分析することが、なぜに深刻なコンフリクトを招く現代の社会状況をバーナード理論で論じ得たことになるのであろうか。その基底には現代社会における一般状況の基本的な問題(：甚だしい利己主義、道徳の低下、貪欲、隣人愛の欠如など)に対する意識の不足が関係していないであろうか。日本の卓越したバーナード研究、例えば飯野春樹、三戸公、村田春夫らの諸著作のことを思い起こして、研究視座の再構築を願うものである。

前述のように本書の第4章はとても興味深いものであるが、敢えて付加的に述べるならば、その中でバーナード協会―チエスター・バーナードの諸著作を、マネジメントの思想の展開を理解するための最も効果的な参考文献の一つとみなす経営学徒の国際組織―の活動にもう少し多く具体的に触れてくれたらと思うのは評者だけであろうか。

飯野春樹編『バーナード：経営者の役割』の196ページには日本バーナード協会の機関紙：ニュース・レターの写真とともに、バーナード協会の日本内外におけるバーナード研究における重要性が端的に記されている。10年の長きにわたり、ニュース・レターの編集・作成に岡田和秀と協働で携わったが故に、評者は协会会员たちの当時の研究活動およびその後の活躍に対する思い入れは人一倍強いのである。本書の執筆者の多くは飯野春樹門下生ではないでしょうか・・・如何ですか。

最後にこれまで多くの初心者、および研究者に読まれ、版を重ね続けている良著、『バーナード：経営者の役割』に比して本書に誇れる優れた点は何であると言えるだろうか。

## 6. 結びに

評者は、本書の評価すべき点は、概説的で初学者に適している、と前述した。しかし、本格的にバーナードから学び、それを経営学研究への踏み石にしたいと思う人にとっては、どうであろうか。前述の間嶋崇からの私信は、執筆者に対するこのような励ましの言葉で終わっている。「・・・本書の前半(第1-3章)については、すでにさまざまな解説書が存在し、とりわけ有斐閣の『バーナード：経営者の役割』は、今でも読まれている良書である。それゆえ、そういった既存の良書から差別化を図るには、本書の後半部分(第4章以降)が非常に重要であり、今後においては、この点についてひとつに纏めた続編が出ることを期待したい。」

以上のような問題点はあるものの、本書は、先述のようにバーナードの思想を正しく、そして分かり易く理解する上でのガイドとして初学者にとって必読の書と言えよう。

(2012年9月5日)